



第 1246 回例会報告

【11 月はロータリー財団月間】

平成 23 年 11 月 10 日(木) 晴れ

会長挨拶

会長 三村昌暉

米山奨学金

日本のロータリーの父「米山梅吉氏」によって1920年に創立された東京ロータリー・クラブが、我国のロータリーの発展に尽力された米山梅吉氏の功績を偲び1953年米山という名称を冠して奨学制度「米山基金」を創設しました。

1957年9月に全国のロータリー・クラブの共同事業として「ロータリー米山奨学委員会」が発足し、1967年に文部省を主務官庁とする(財)ロータリー米山記念奨学会が設立され、50有余年の歴史をもち現在に至っています。

米山奨学事業は日本の学術や技術を学び、あるいは日本の文化を研究する目的で日本に在留している外国人私費留学生に対し、ロータリーの理念とする国際理解と国際親善を深めるために、全日本のロータリアンの寄付金を財源として、奨学金を支給、援助して前途有望な青年を育成する事業です。

一番の特徴は、その規模です。米山奨学生の採用数は年間800人。世界規模で展開しているR財団国際親善奨学生の年間採用数と同じで、日本国内では民間最大規模です。奨学金団体として他団体の奨学金制度と大きく異なる点は世話クラブとカウンセラー制度です。

世話クラブとは、一つのクラブが一人の奨学生の世話クラブとなり、奨学生は世話クラブの例会に月に一度出席し、ロータリー会員と積極的に交流して国際交流・相互理解を深めるとともに、親睦活動や奉仕活動に参加しロータリーの奉仕の心を学びます。

奨学金の受け渡しも行います。

カウンセラーとは、世話クラブの中から一人のロータリアンがカウンセラーとなり、奨学生の個人的ケアあたるアドバイザーです。

奨学生はロータリー・クラブを通して日本の文化、習慣などに触れ、社会参加と社会貢献の意識を育て、将来ロータリーの理想とする国際平和の創造と維持に貢献

する人となることが期待されます。

他の多くのプログラムが世界のロータリー共通の事業であるのに対し、米山奨学制度は日本のロータリー独自のものです。

10月は職業奉仕月間でしたが、日本のロータリーでは毎年10月を米山月間とし、各クラブに米山奨学生や地区米山奨学委員を派遣してスピーチを行うなど、米山奨学の意義と理解を広める強化期間としています。

◇幹事報告◇

【報告事項】

- ①2012年度バンコクで開催される「国際ローター年次大会」に参加ご希望社はパンフの回覧をご覧下さい。
- ②今期地区にて大会RI会長代理をされた管野多利雄様より「良きロータリアンになるための10カ条」と題しての文書が送られてきました。ご高覧下さい。

【連絡事項】

- ①伊那文化会館で行われている「遠き道展」が開催されております。

11/22(火) 11/26(土) 松本盲学校の生徒さんが来場されるので、介護や明るくお話をして頂けるボランティアを募集しています。2日間とも12:00~3時間程度のご協力をお願い致します。特に、22日に多人

■ニコニコBOX

20名	25,000円
累計	461,000円
目標額	130万円
達成率	35.4%

■今週のこトバ

■出席報告

会員数	33名
出席対象	33名
出席者数	23名
出席率	69.6%
前回修正	81.8%

■次回のプログラム

11月24日

会員増強について

会員増強特別委員会



数をお願いとのこと。やさしさが大切とのことですので奥様方をお願いをしてみして下さい。申し込みは幹事まで。

②「CDを購入しましょう」との説明を付けて、先の大震災における復興支援の一助として仙台市立八軒中学校・吹奏楽/合唱部の生徒さんが合唱し演奏した曲を収録した「あすという日が」のCDの購入をお願い致します。一枚1,000円

【受領文書】

ウィークリー=諏訪 RC・富士見 RC

バギオだより

佐久コスモス RC から創立 20 周年記念誌

がバナーエト事務所開設のお知らせ

第 1246 回例会

米山奨学生 李 素婷さん卓話、

国際奉仕委員会

私の名前は 李 素婷(イ ソジョン)です。生まれは韓国のソウルです。

ソウルの国民大学ではデザインを勉強しましたが、副専攻として日本学を取りました。専門のデザインより日本学のほうが魅力を感じたので、卒業後は大学で学んだ日本語と日本についての知識が生かせる職場に就職しました。



日本に来る前は「張寿景 日本語学校」という日本語専門塾で日本語を教えていました。この塾は韓国で高校を卒業した後、すぐ日本の4年制大学に進学することを希望する高校生たちが通う塾でした。しかし、1年が経ったころ、留学経験のないまま、日本と日本人について教えることに限界を感じ、日本に留学することに決めました。専攻する分野として日本語教育学を選択することも出来たのですが、日本と日本人をもっと深く理解するためには、日本の歴史をまずしっかり勉強すべきだと思いました。また、日本と韓国の交流が活発になっているにもかかわらず、たびたび日韓交流の障害になっている「歴史問題」について自分なりの理解を得たいとも思いました。

2009年4月にまず科目等履修生(特定科目だけを受講する非正規生)として日本に来ました。大学院で指導を受けたいと思っていた笹本正治先生の日本中世史ゼミに所属し、学部生たちと一緒に授業を受けながら大学院の入学試験に備えて勉強しました。この年、このゼミでは『真田氏三代』という笹本先生が書いた本を教材に

して、武田家の家臣だった真田家が、武田家滅亡後、戦国時代末期から豊臣秀吉政権期までをどうやって生き抜いたかを勉強しました。

武田家や真田家というローカルな話から始まって豊臣秀吉による全国統一につながっていく授業内容を通じて、豊臣秀吉の朝鮮出兵の前の日本事情を知ることができました。この部分は韓国での歴史教育ではほとんど触れない部分なのでとても興味深かったし、豊臣秀吉という人物が日本ではどう評価され、どう認識されているかを知る良い機会でした。前期のこの授業のまとめとして、夏休みのゼミ旅行で九州の「肥前名護屋城」に行きました。2010年には前年の真田氏についての授業、肥前名護屋城見学の流れを汲んで、夏休みのゼミ旅行で韓国の南海岸に残っている「倭城」(朝鮮出兵時、倭軍が長期戦に備えて朝鮮半島の南海岸に築いたお城)にも訪れました。

今私の研究論文のテーマは「16世紀末から17世紀初頭における朝鮮半島から見た琉球王国」です。この時期に東アジア世界には大きな変化がありました。中国では明が滅びて清が始まり、日本では豊臣秀吉による全国統一がありました。また、朝鮮と日本の間では1592年から1598年まで、7年にわたる戦争がありました。この戦争を韓国では、壬辰の年に起きた倭人による乱という意味で「壬辰倭乱」と呼び、日本の方では「文禄・慶長の役」と呼んでいます。一般的には「豊臣秀吉の朝鮮出兵」として知られているので、卓話スピーチなどではこの呼び方を使っています。

この戦争については韓国でも日本でも数多くの研究が行われてきたのですが、韓国も日本もこの戦争の当事者であるため、それぞれ自分の立場に立っての研究結果では、この戦争のことを客観的にとらえるのは難しいです。最近、この戦争を東アジア世界での「国際戦争」としてとらえる観点が重要視されています。この戦争は、舞台は朝鮮でしたが、朝鮮軍と倭軍だけではなく、明軍も参戦したし、しかも明軍は多民族からなる傭兵集団だったそうです。琉球王国は、当時、東アジア世界の独立王国として存在しながら、中国・朝鮮・日本3国とも深い関係を持っていました。琉球王国がこの時期どのような行動を取ったのかを探ってみることで、当時の状況を第三者的立場から捉えられるのではないかと思います。

卒業後は日本で仕事をしたいと思っていますのですが、金銭的な問題で就職活動の時期に就職活動がほとんどできなかったため、来年以降の予定はまだ何も決まっていません。今はまず論文をきちんと書いて締め切り内に提出することを目標にしています。論文提出の締め切りが12月25日なので、1月からでも就職活動してみたいと思います。(文責:溝口国際奉仕委員長)

三村会長からもイ・ソジョンさんの講演原稿をいただいております。後日記載か、ホームページに記載いたします